

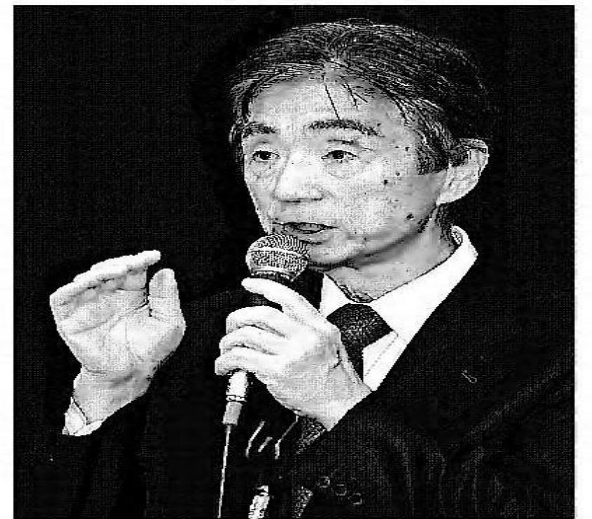
# 進む教育改革

読売新聞大阪本社「大学関西フォーラム」第18回懇話会が3日、「大学の創造力と多様性を求めて」をテーマに、大阪市北区のクラブ関西で開かれ、大学・短大の学長や理事長ら約100人が参加した。日本学術振興会の安西祐一郎理事長が「創造力と主体性 教育改革の課題と展望」と題して基調講演。4大学の学長や教員が少子化やグローバル(国際)化に対応した大学改革の実例を報告した。

まず、なぜ教育改革を進める必要があるのかというところから、話を進めたい。

大学に入学する世代の18歳人口が1993年から急減した。最近では多少落ちついてきているものの、2018年に再び減り始める。「団塊の世代」の

基調講演 日本学術振興会理事長 **安西祐一郎** 氏



## 少子化生き抜く力創る

時代だった1967年に比べ、長期的な予測は極めて困難だと半分にも満たなくなってきた。

18歳人口が減り始めた90年代は国内でバブル経済が崩壊、東西ドイツの統一やソビエト連邦の崩壊が起きた。インターネットの普及で社会構造が大きく変わり、世界情勢

慶応大学院博士課程修了。同大学教授、慶応義塾長を経て、2011年から現職。今年2月まで中央教育審議会議長を務めた。専門は認知科学・情報科学。

半減していく、予測のつかない世界を生き抜かなければならない。そのためにどういう学びの場を用意するのか考えるのが、我々大人に課せられた義務だ。

2011年には60万人が大学に進学した。一方で、専門学校進学や就職を選ぶ生徒も

い。周りの環境を整えないといけない。

高大接続答申は、これらすべてを視野に改革することを求めている。文科省が設けた答申を具体化する有識者会議の名称には「システム改革」の文言が入った。これは高い必要を二層に改革しようという意味が込められた。

日本の高校や大学では一つの学校の閉じた空間で限られた仲間と勉強や部活に取り組む傾向が強い。しかし社会に出たならいきなり全く知らない様々な人たちと協力してプロジェクトを立ち上げ、目標を達成しなければならぬ。

学びの原動力は主体性だ。目標を自ら見いだし、多様な人々と協力して学び、働く。このような力を学生一人ひとりが身に付けられる教育を、高校や大学に根付かせることが重要になる。

新しい学習指導要領に学習

## 大学関西フォーラム 第18回懇話会



特別講演 関西学院大学学長 **村田治** 氏

関西学院大経済学研究所博士課程単位取得。同大経済学部長、高等教育推進センター長を経て、2014年から学長。専門はマクロ経済学。

1ドになり能力開発の教育が始まっている。こうした教育に取り組む学校からは「大学は、私たちが育てた生徒たちをしっかりと受け止めるのか」との疑念が生じており、私立の高校の中には、卒業生を海外の大学に進学させる動きがある。

た。連携を進め、世界で競争できる人材を養成するに、日本からの留学を増やすだけでなく、大学の制度そのものを国際的に通用するよう変える改革が必要だ。

一方、企業は社員を育成する経済的余裕を失っているから、大学が基本的な能力を養う教育を施し、卒業時点での学生の質を確保することが求められている。

世界的に見ると学生の質は、文化、技術的ツールを活用する能力、多様な集団での人間関係形成能力、自律的に行動する能力と考えられている。

こうした考え方は日本の小、中学、高校でもキーワード

### \* 事例報告

日本の科学技術分野では女性研究者の割合が14%と世界的に見て低い。これを3割に増やそうと国が2006年度から始めた事業に、12年度から採択され、「育児・介護支援」「キャリア支援」「国際化支援」「調査・広報」機能を持つ支援センターを設けた。

女性研究者を大学院生らが支援する制度は好評だった。子どもの体調不良など急な事態にも研究を中断する必要がなくなり、評価の高い研究成果、国の研究費補助金の対象になる研究が目立って増えた。支援する

## 学内に保育施設

側の大学院生が研究者を目指す事例も出てきた。

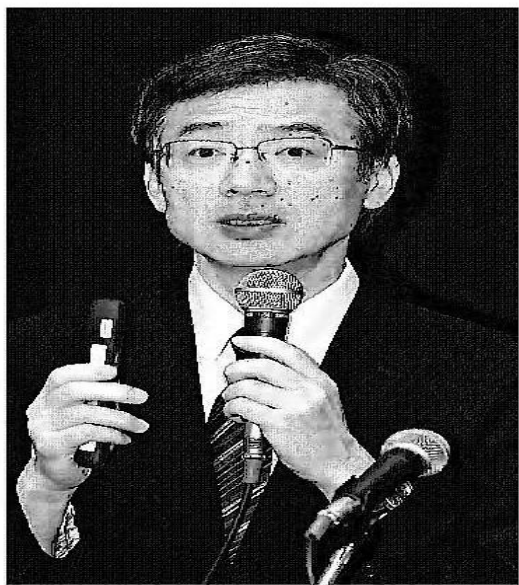
学内に保育施設を開設し、英語論文の書き方を指導する講座を開くなどした結果、33%だった女性研究者の割合が40%に増えた。

全体の比率は増え、私たちの改革は成功したように見えるが、教授クラスでは増えていない。ある専門分野からは「元々、女性研究者が少ないのだから増やせない」との声が上がった。

会議が午後6時以降に始まるなど労働のスタイルが変わらず、責任ある立場の女性研究者が育児や介護を続けられない現状もある。

男性側には「なぜ、女性が優遇されるのか」という

武庫川女子大女性研究者支援センター副センター長 **福尾恵介** 氏



鳥取大医学部。大阪大医学系研究科助教などを経て、2009年から武庫川女子大生協働学部長。12年から栄養科学研究所長を兼務。専門は老年医学。

## 求められる「質」向上

国際化の軸の一つは、学生を海外に送り出す取り組みだ。日本だけでなく、世界の大学の潮流になっている。多様性を理解し、主体的に学ぶ経験をすることは海外へ行くのが一番からだ。

関西学院大も選ばれた文部科学省認定のスーパーグローバル大学には、海外の大学との連携が推奨され

求められる「質」向上